

イギリス文学にみられるスポーツについて (3)
C.Dickensと「合理的娯楽」運動A Study of Sport appeared in English Literature (3)
C.Dickens and Rational Recreation Movement山田 岳志
Takeshi YAMADA

Abstract The aim of this study is to make clear rational recreation movement in relation to the social structure in the nineteenth century England. C.Dickens' "Hard Times" is examined here. Literature works have been thought to be a useful means of assessing of sport. Literature makes it possible to analyse contemporary society more realistically than by social science because it tends to show the time and society more vividly its free imagination. To explain sport through literature seems to be most suitable approach. From this point of view, rational recreation movement in the nineteenth century England will be discussed in this paper, mainly concerning power in modern society and traditional recreation in the work of C.Dickens.

はじめに

近年、民衆文化に関する歴史的研究において民衆の生活文化と権力が交差する一つの界面として身体文化が照射されるという傾向がみられる。こうした研究傾向の契機として考えられることは、最近、社会史研究などで注目されている権力・ヘゲモニーなどの概念を従来の研究成果に立脚しつつ、身体文化を媒介とする諸活動と権力との関連を通して社会秩序、モラル、生活規範などの正当性を再考する契機として捉え、それらを文化的、社会的な視点から意味づけしようとする試みであるように思われる。¹⁾

本稿の目的も、こうした視点から1850年代の「イングランドの状態」問題から看過できなくなってきた伝統的な民衆娯楽について、中流階級の社会統制策・階級融和策としての一面のみに限定し

てC.ディケンズの〈Hard Times〉を手がかりに若干の検討を試みる。ギッシングは〈チャールズ・ディケンズ論〉においてC. ディケンズこそヴィクトリア朝社会環境の正確無比な表現者であり、しかも彼の諸作品においてもっとも得意とした描写こそ「イギリス人のある階層……風俗習慣をもつことで有名なある階層」についてであったと指摘する。²⁾ ここでのある階層が、典型的イギリス人が属する下層中産階級から貧困階級であったことは、これまでの諸研究が教示してくれる。G.オーウェルの批判にもかかわらず、〈Hard Times〉を典拠とするのもそこに描写される労働者階級の日常生活の写実性にこそある。³⁾

さて、1850年代になって中流階級は社会の進歩に加担しつつ、社会関係を固定したまま伝統に拘泥する守旧制を強く忌避する一方で、福音主義的宗教感情とレスベクタピリティ崇拜とが交雑した価値観で、労働者階級に対する労働規律の身体化を試みるために諸改革運動を展開していくようにな

る。その中において民衆文化は進歩と合理化と対置して捉えられ、特に伝統的な民衆娯楽の在り方に関心が集中するようになっていくのである。

Geoffrey Bestは〈Mid-Victorian Britain 1851-75〉において1850年代に都市に集中する労働者階級の娯楽の在り方が中流階級の関心の的になった事実に注目し、そして労働者階級の教化を目的とした「まともな娯楽」によって労働者階級を導こうとする傾向が強まったことを指摘している。⁴⁾ こうした時代的雰囲気をも十分に認識していたと思われるC.ディケンズの労働者階級の娯楽に対する姿勢はどのようなものであったろうか。C.ディケンズは障害を通して労働者階級の娯楽権利と自由な時間にける娯楽追の権利を擁護してきたと言われる。たしかに〈Sketches by Boz〉の“Greenwich Fair”における労働者階級の遊びを楽しむ姿勢の描写といい、⁵⁾ 〈All Yeras Round〉(1859-93)といった週刊雑誌の刊行、クリスマスの読み物などを通してC.ディケンズは労働者階級に娯楽を提供することを自らの使命としてきた。また、〈Household Words〉(第一巻第一号と第三号、1850年3月30日、4月13日)⁶⁾ においては民衆の娯楽の効用を説き、初期の社会評論〈Sunday under Three Heads〉においては安息日に反対しながら日曜日における図書館や博物館の開放を唱えてきたのである。⁷⁾ しかしながら、C.ディケンズには労働者階級の娯楽に対する姿勢、つまり、娯楽によって労働者階級の道徳的教化を試みようとした側面もみられるように思われる。1850年、C.ディケンズは〈Household Words〉を創刊するにあたって、Mrs Gaskell とJ.Forster宛の手紙のなかで、その目的について「あらゆる階層の読者に教訓と娯楽を提供すること」、「しいたげられた人々を救い、わが国の社会状態を全般的に改善すること」⁸⁾ と記述している。このことは、C.ディケンズが1850年代のイギリスを中流階級とともに改革していこうとする意識の現れであったように思われる。こうしたC.ディケンズの労働者階級の娯楽に対する姿勢は、有用知識普及協会の出版物を引き受けていたチャールズ・ナイトに宛てた手紙からも推察できよう。

And I earnestly entreat your attention to the point (I have been working upon it, week

past, in Hard Times)

The English are, so far as I know, the hardest worked people on whom the sun shines. Be content if in their wretched intervals of leisure they read for amusement and do no worse.⁹⁾

1850年代において貧困を「危険な階級」と同義的にみていた中流階級は労働者階級を総体として教育していくための手段として労働規律の身体化を展開していくようになる。ここでは、19世紀イギリス社会の概観と合わせてC.ディケンズの〈Hard Times〉を手がかりとして、彼の労働者階級の娯楽に対する姿勢を追究してみる。

なお、本研究はイギリス文学作品にみられるスポーツ像を設定するための大雑把な予備的試みでもある。

1 民衆娯楽の衰退

〈Tom Browns Schooldays〉の主人公、トム・ブラウンが少年時代を過ごしたパークシャーで行われていた年に一度の村祭りでは、サーカス団が巡回してきて祭り気分を盛り立てていた。しかし、こうした情景も、やがて中流階級の価値観に見合った娯楽としての巡回文庫とか博物館といった娯楽に取って変わられていくようになる。でな都市における状況はどうであったか。ここではC.ディケンズの諸作品を通して工業化されていく社会の状況と伝統的な民衆娯楽の関係を観ていくことにする。

「陰気で息が詰まりそうで退屈なロンドンの日曜日であった……………働かすぎた市民たちにちょっとでも慰安を与えそうな場所は、すべて厳重な門戸を閉じ、門をかけている。……………見るものといったら街路、街路、街路だけ。ふさいだ心をまぎらすものも、元気づけるものもない。」¹⁰⁾、「少年になってからの眠たい日曜日、……………未成年末期のいつまでも終わらない日曜日……………もう少し後になると腹立たしい日曜日……………考えても何にもならぬ惨めさと屈辱にあふれた日曜日」¹¹⁾ このようにC.ディケンズは近代化されていく都市における労働者階級の様子を黒白ともにはっきりした筆で描きだしていくのである。もともとC.ディケンズはジャーナリストの出身である。見たり、眺めたり、描いたりする

ことはお手のものであった。ロンドンにおける厳格な安息日遵守主義がどのようなものであったか、C.ディケンズの諸作品は労働者階級の日曜日の実態を教示してくれるのである。R.W.Malcolmsonによれば、伝統的な民衆娯楽が衰退していった原因を、特に信仰と社会的責任とを結びつけて「自助」、「自立」、「自尊」の世俗版道徳立を生み出した福音主義的宗教感情が伝統的な民衆娯楽の諸特徴と相対するものであったからである、と指摘している。¹²⁾ 特に「聖月曜日」の習慣に恋々とする「怠惰な労働者」、そして「危険な群衆」、「火のつきやすい暴徒」としての側面をもつ労働者階級の顔は、伝統的な民衆娯楽と常に結びついており、福音主義者たちに恐怖感をもたらしていたのである。こうして、「改良の時代」における福音主義者たちは安息日の厳格な遵守を唱える一方で、日曜日における伝統的な民衆娯楽の統制を行うようになっていくのである。C.ディケンズにおいても民衆娯楽と結びついた労働者階級の飲酒癖が、労働者階級の生活向上の障害になっていることを十分に認識していたように思われる。〈荒涼館〉における煉瓦職人の家庭の様子、¹³⁾ 〈共通の友〉における人形衣装屋の飲んだくれの父親、¹⁴⁾ 〈Hard Times〉におけるステューヴンのアル中の妻¹⁵⁾ 等は、いずれも飲酒癖による悲惨さを描きだしている。〈Household Words〉(第111号、5月8日)でセイラは“Open-Air Entertainment”と題するルポで彼が目撃した市(Fair)について述べているが、そこではイギリスの労働者階級の道徳的墮落と群衆の非人間的行為が市(Fair)によって助長されていると指摘している。¹⁶⁾ こうして1850年代の福音主義的な運動は、イギリス社会に日曜日遵守の社会コードを設けるようになっていくのである。

2 C.ディケンズと「イングランドの状態」

ここでは1850年代になってイギリスの代表的な産業都市へと成長していった、〈骨董屋〉の舞台となったバーミンガムと〈Hard Times〉の舞台となったマンチェスターについてC.ディケンズの眼を通して概観してみる。「ふたりの旅のすべてをとおして、このときほど清らかな空気と開けたいなかを熱烈に希んだことはなく、それをあこがれ求めたことはなかった。……あのときでも、いまほどに、森、小高い丘の、野の新

鮮な孤独をこうまで強く求めてはいなかった。いまは、大きな工業都市の騒音、よごれた蒸気が、瘦せ細ったみじめさと飢えた物悲しさの臭気を放って、彼らを四方八方とりかこみ、希望を閉めだし、逃亡を不可能にしているようだった。……四方八方、どんよりとした遠く目のとどくところまで、群がり集まり、悪夢のおそろしい特徴になっているあの醜悪さで、動きのない形のはてしないくりかえしをおこなっている高い煙突が疾病の煙をはきだし、光をさえぎり、ものわびしく大気をきたなくよごしていた」¹⁷⁾ 産業革命当時のバーミンガムの社会描写である。では、C.ディケンズがブルジョワとプロレタリアとの対立をはじめて描いたといわれる〈Hard Times〉において当時の社会はどのように描かれていたのか。

It was town of machinery and tall chimneys, out of which interminable serpents trailed themselves for ever and ever, and never got uncoiled. It had a back canal in it, and a river that ran purple with ill-smelling where there was a rattling and a trembling all day long, and where the piston of the steam engine worked monotonously up and down like the head of an elephant in a state of melancholy madness.¹⁸⁾

1850年代のマンチェスターがモデルといわれるコークタウンは「機械と高い煙突の町」であった。町のあちこちにそびえる煙突からは昼夜をわかつた煙がもくもくとでており、川の水は工場排水で汚染され黒紫色にかわり、悪臭を放っていた。C.ディケンズの作品は1850年代の新興工業都市の社会環境が劣悪になっていく様子を提示してくれるが、また、劣悪な生活環境での長時間にわたる単純な労働、そして工場労働者の悲惨な生活を生み出すブルジョワ功利主義への批判、工場労働者のストライキ等、当時の時事問題がからみあうかたちで展開されていくのである。こうした労働者階級の悲惨な状況を、ギッシングは暖衣飽食の中流階級が社会的成長を遂げ、彼らの特質である執念深い現実主義が残酷なエゴイズムとなって現れだした結果であると指摘している。¹⁹⁾

しかしながら、「自助」の精神、勤勉と忍耐によって支えられた自由競争の資本主義者たちにとっては何よりも労働者階級を総体として教育する必要

が生じてくる。「……………夜になると、すべての奇妙な機械の立てる音は暗闇でなおひどいものになり、その近くの人たちの様相はもっと荒々しく野性的になり、失業した労働者の群が道路で示威行進をし、指導者のまわりにかがり火をもって蟻集し、指導者はそうした群衆に激しい言葉で自分たちの受けた不当な仕打ちを知らせ、彼らに怒号とおどしの文句を叫ばせていた。逆上した男たちは剣や松明で武装し、自分たちをとめようとする女の涙と懇願をはねつけ、恐怖と破壊の行動にとびだしていった……………」²⁰⁾

because there was a native organization in Coketown itself, whose members ware to be heard of in the House Commons every session, indignantly petitioning for acts of parliament that should make these people religious by main force. Then came the Teetotal Society, who complained that these same people would get drunk, and get drunk, and proved at tea parties that no inducement, human or Divine (except a medal) would induce them to for go their custom of gting drunk. Then came the chemist and druggist, with other tabular statement, showing that when they didn' t get drunk, they took opium.²¹⁾

たしかに労働者階級の運主癖は伝統的な民衆娯楽と直接結びつくものとして、福音主義者たちは「改良の時代」にふさわしく、無知で怠惰な労働者階級にたいして禁酒運動を展開していくようになる。さて、工業化と都市化の進展は、「怠惰」、「不道德」、「不節制」、「無秩序」といったありとあらゆる非難を浴びせられた労働者階級を生みだしていくようになり、社会に脅威を与えていくようになる。こうなると中流階級にとっては、労働者階級の生活・行動様式自体が反抗的と映る労働者階級の文化の再生をいかに断ち切るかが問題となってくるのである。²²⁾ 1850年代になって中流階級によって展開された『合理的娯楽』運動はこうした事態をふまえつつ、労働者階級の身体の規律化を推し進めていくのである。では、C.ディケンズはこうした「イングランドの状態」を〈Hard Times〉でどう展開したのか。

3 セルフメイド・マンと娯楽

Now what I want is, Facts Teach these boys and girls nothing but Facts, Facts alone are wanted in life. Plant nothing else, and root out everything else. You can only form the minds of reasoning animals upon Facts. nothing else will never be of any service to them. This is the principle on which I bring up my own children, and this is the principle on which I bring up these children. Stick to Facts, Sir!²³⁾

この冒頭の一節 (The One Thing Needful) は、功利主義を信奉する実業家、トマス・グラッドグラインドが経営する学校で、彼がその教育方針を飾り気のない、がらんとした、単調な、丸天井の教室で生徒一同に垂れている教訓である。そして第二章 (Murdering the Innocent) で言うように、彼は A man of realities. A man of fact and calculation. である。この「現実的で打算な人」トマス・グラッドグラインドにとって、事実を教育する目的は、人間的なものを一切摘み取ってしまい、空想とか理想といったものを追い出し、美しいものに感動する心を押しつぶして、社会に役たつ、従順な人間を教育することであった。このベンサム主義的な学校で模範生であったピッツァーは生命感めきの知識を身につけて、理性によって導かれ、思いやりとか人情にほだされることはなかった。

but, I am sure you know that the whole social system is a question of self-interest. What you must always appeal to, is a persons self-interest.²⁴⁾

ピッツァーによれば、社会とは自己の利益という問題に帰着する、というのである。であれば、彼はどこまでも用心深く、彼の行動原理はどこまでも冷静かつ打算的なものであった。ではこの見上げた若き経済人にとって、娯楽とは何であつたらうか。「6シリングから6000ポンド」の哲学者は、コークタウンの労働者階級に対して有益有効な生き方には留意もせず、組合をつくって団結をはかつたり、娯楽を欲しがる彼らを軽蔑するのである。²⁵⁾

As to their wanting recreation ma' am, said Bitzer, it' s stuff and nonsense. I don' t want recreation. I n'rver did, and I never shall ; I don' t like 'em²⁶⁾

功利主義の経済学徒、身を立て名をなすためにも最適な素質を持つ若者を世に送り出しのは、トマス・グラッドグラインドが経営する学校であった。

“……It' s your only hold. We are so constituted. I was brought up in that catechism when I was very young, Sir, as you are aware. ”
27)

“……couldn' t be carried on without one. No man, Sir, acquainted with the facts established by Harvet relating to the circulation of the blood, can doubt that I have a heart.……It is accessible to Reason, Sir, returned the excellent young man, “And to nothing else”²⁸⁾

このようにハートというと血液の循環、つまり医学的知識はすぐに口をついてでるが、それが感情の源であることを全く理解できない若き経済学徒、ピツター。このコークタウンのセルフメイド・マンにとって娯楽とは、トマス・グラッドグラインドがサーカスを「けしからぬ職業」として否定したように、ピツターも同様であった。また、労働者階級の娯楽に対しても、法外で贅沢な、あ

4 C.ディケンズと娯楽

〈Hard Times〉の主人公ともいべきコークタウンの職工、スチーヴン・ブラックプールはストライキにも参加せず、トマス・グラッドグラウンドの功利主義にも反対する理想的な労働者像としてえがかれている。しかしながら、彼はコークタウンの劣悪な生活環境、未来への希望も変化もない、単調な無味乾燥な日々の繰り返しである。²⁹⁾ こうした労働者階級のおかれた状況を十分に認識していたと思われるC.ディケンズは、労働者階級の娯楽の必要性を説いていく。

I ENTERTAIN a weak idea that the English people are as hard-worked as any people upon whom the sun shines. I acknowledge to this ridiculous idiosyncrasy, as a reason why I would give them a little more play.³⁰⁾

このように、C.ディケンズが労働者階級の娯楽を擁護する姿勢は、娯楽を法外な贅沢と決めつけるトマス・グラッドグラインドとは対象的である。

That exactly in th ratio as they worked long and monotonously,, the craving grew within them for some physical relief ……some relaxatio, encouraging good humour and good spirits, and giving them a vent ……some recognized holiday, though it were but for an honest dance to a stirring band of music ……some occasional light pie in which even M 'Choakumchild had no finger ……which craving must and would be satisfied aright, or must and wuld inevitably go wrong, until the laws of the Creation were repealed?³¹⁾

こうして、C.ディケンズは労働者階級にとって長時間の労働から開放された後には、何か身体的、精神的な気晴らしが必要であると説いていくが、精神的な気晴らしが必要であると説いていくが、例えば、図書館での知育教育（読書）は感情や愛情を育むためにも必要であると強調しているのである。

They sometimes, after fifteen hours work, sat down to read mere fables about men and women, more or less like themselves and about children, more or less like their own.³²⁾

さて、〈Hard Times〉において、トマス・グラッドグラインドの事実偏重主義の、詰め込み教育の犠牲となっていく彼の子供たち、ルイザとトムの運命が語られていく。

“What do I know, father ” said Louisa in her quiet manner, “of tastes and fancies ; of aspirations and affections ; of all that part of

my nature in which such light things might have been nourished? What escape have I had from problems that could be demonstrated, and realities that could be grasped? ”³³⁾

とりわけ、ルイザはサーカス(娯楽)が象徴するような想像力や空想の世界を奪われてしまうのである。ところで、C.ディケンズは労働者階級のグラッド・ステーションとルイザやトムが求めている(必要)なものが娯楽であることを示唆している。

Is it possible, I wonder, that there was any analogy between the case of the Coketown population and the case of the little Gradgrinds? ”³⁴⁾

このように、C.ディケンズは〈Hard Times〉においてトマス・グラッドグランドの子供たちと労働者階級のステーションを結びつける要素が日常生活における気晴らしの欠如であることを強調していくが、ここでは労働者階級と娯楽との係わりかたをどのように捉えていたかをみていきたい。

Surely, none of us in our sober senses and time of day, that one of the foremost elements in the existence of the Coketown working-people had been for score of years deliberately set at nought? That there was an Fancy in them demanding to be brought into healthy existence instead of struggling on in convulsions? ”³⁵⁾

コークタウンの労働者階級の日常生活に必要なもの、それも何十年來、故意に排除されてきた娯楽が適切な発露の場がないとき、それは危険なエネルギーに転じる可能性をも秘めていることを暗示している。C.ディケンズは、労働者階級のなかに無意識に潜むエネルギーを昇華する娯楽の問題が、社会秩序をも脅かしかねないことを認知していたようにおもわれる。であれば、C.ディケンズにとって娯楽の問題は労働者階級を教化する手段として捉えるようになっていくのである。C.ディケンズは〈Household Words〉において、演劇を擁護するエッセイ、“The Amusement of the people”のなかで、労働者階級の娯楽の性質を向上させる

こと、すくなくとも善良で素朴で健全な娯楽を唱えているのである。³⁶⁾つまり、C.ディケンズにとって、労働者階級にとっての娯楽の在り方、それが健全な娯楽のありかたについてという彼の主張の背景には、娯楽を労働者階級の教化の手段として考えていたようにも思われる。

そこには、民衆の娯楽を擁護した反面、娯楽を労働との対比によって肯定するといったC.ディケンズの姿勢には、労働における社会秩序の維持という彼の娯楽への意識があったように思われる。

暫定的結語

1850年代の『合理的娯楽』運動について、C.ディケンズの〈Hard Times〉を中心に、その大雑把な追究を試みた。「改良の時代」といわれた1850年代に、中流階級によって展開された『合理的娯楽』運動の背景には、パターナルな社会の崩壊によって労働規律を身体化することなく、「怠惰な労働者」としての側面をもち、暴徒としての「危険な階級」としての側面をもつ労働者階級の顔が治安を脅かす看過できない問題として認識されたことにある。こうして、『合理的娯楽』運動は中流階級の価値観に見合った道具でなければならぬと言う認識は知識階級の共通のものとなっていく。「娯楽作家」、C.ディケンズの諸作品には労働者階級の娯楽を擁護する姿勢が散在する。しかしながら、〈Hard Times〉において娯楽は労働者階級を教化する手段として捉えられているように思えるのである。こうした娯楽に対するC.ディケンズの姿勢は、1850年代の『合理的娯楽』運動を展開していった中流階級の立場に同調する側面も持ち合わせていたように思われる。

* 本研究は、平成8年度基礎教育系の研究費(重点配分)の援助を受けました。

引用・参考文献

- 1) 川島昭夫 「近代化と民衆娯楽」 体育史専門分科会定期大会・特別企画抄録集、P.2 1996.
- 2) 小池 滋訳 「チャールズ・ディケンズ論」

- P.6, 秀文インターナショナル、東京、1988.
- 3) 小野寺 健編訳 「オーウェル評論集」 P.54
岩波文庫、東京
- 4) Geoffrey Best, "Mid-victorian Britain 1851-1875",
P.218—49, Fontana Press 1979.
- 5) C. Dickens "Sketches by Boz" P.111—18
Oxford Univ. Press 1969.
- 6) C. Dickens "The Amusement of the People" in
Household Words, March 30, 1850. April 13,
1850.
- 7) C. Dickens "Sunday under Three Heads"
Chapman & Hall, London 1906.
- 8) Graham Storey, Kathleen Tiltson and Angus Easso
(ed) "The Letters of Charles Dickens" P.25,
Clarendon Press, Oxford. 1993, Vol.6
- 9) "The letters of Charles Dickens" P.294, Vol.5.
- 10) 小池 滋訳 「リトル・ドリット」 P.61, ち
くま文庫 東京 1991.
- 11) 前掲書 P.63—64.
- 12) R.W. Malcolmson, "Popular Recreation in English
Society 1700-1850" Cambridge Univ., Press. 1973.
- 13) 青木雄造、小池 滋訳 「荒涼館」筑摩書房
東京 昭和56年
- 14) 間 二郎訳 「我らが共通の友」 ちくま文庫
東京 1997.
- 15) C. Dickens "Hard Times" Oxford Univ. Press
1989.
- 16) "Household Words" 第97号 1月31日
- 17) 北川悌二訳 「骨董屋」 P.102-103. 筑摩文庫
(下) 東京 1989.
- 18) "Hard Times" P.28.
- 19) 「チャールズ・ディケンズ論」 P.5.
- 20) 前掲書 P.107.
- 21) "Hard Times" P.30.
- 22) 長谷川博隆編 「権力・知・日常」 P.176 名
古屋大学出版会 名古屋 1991.
- 23) "Hard Times" P.1.
- 24) "Hard Times" P.383.
- 25) 村松昌家 「ディケンズの小説とその時代」
P.184. 研究社出版 東京 1989
- 26) "Hard Times" P.156.
- 27) "Hard Times" P.383.
- 28) "Hard Times" P.382.
- 29) 三ツ星堅三 「チャールズ・ディケンズ」
P.152. 創元社 東京 1995.
- 30) "Hard Times" P.83.
- 31) "Hard Times" P.32.
- 32) "Hard Times" P.65.
- 33) "Hard Times" P.134.
- 34) "Hard Times" P.31.
- 35) "Hard Times" P.32.
- 36) 新野 緑 「民衆の文化誌—労働・娯楽・教
育」研究社出版 東京 1996.

本研究が、上記の文献に依拠しながら展開さ
れていることを付記しておく。

(受理 平成10年3月20日)